

余命検索サービスXIDAY

私は30歳前後のころ、東京で仕事をしていました。毎年正月には帰省して、実家のお寺の報恩講にお参りするのが、年のはじめの恒例で、子どもの頃から親しくしているご門徒の方々と、久し振りに会えるのも楽しみの一つでした。

ある年の正月の帰省時でのことです。いつもの報恩講で、少し気になることがありました。毎年、お参りに来ている同級生のY君のお母さんの姿がなかったのです。それで母に「Yくんのお母さん、お参りに来てなかったね」と聞くと、母は「実はね、Yくん亡くなったんだよ。私は驚きました。そして矢継ぎ早に詰問するように母に、「いつ?」「去年の秋だよ」「何処で?」「東京だよ」「なんで?」「詳しいことはわからないけど、出勤してこないから、職場の人がアパートに訪ねたら、布団の中で死んでいたそうだよ。死後3日ぐらい経っていたんだって」。彼は東京で仕事をしていたのです。後でわかったことですが、彼は私の住んでいた所から、ごく近くで生活をしていました。近くて遠い死でした。いや、近くて遠い死にしてしまったのです。私は彼を見殺しにしたのです。

Yくんは幼馴染みでした。小学校に入る前は、毎日泥んこになって遊んでいたのですが、小学生になって私たちの環境が変わりました。彼は少し動作が遅く、その動きが滑稽に見えたらしく、だんだん周りからバカにされ、いじめられていったのです。

ある出来事がありました。小学校高学年の秋の運動会の時、大勢の生徒や保護者の見守る中、Yくんは百メートル競走でピリを走っていたのですが、その走り方を見て、皆が大笑いをしているのです。馬鹿にした笑いでした。彼のお母さんもその場にいました。顔を真っ赤にして恥ずかしげで下を向いていました。私は複雑な気持ちになって、言いようのない残酷さを感じていました。そして心の中で「笑うな」と叫んでいたのです。でもそれは口にできませんでした。彼をかばえば、いじめの矛先が自分に向かってくるからです。その後も酷いいじめがありました。心の中で「ごめんね」と言いながら目をつぶっていました。私の自己保身が彼を黙殺したのです。そしてだんだん疎遠になっていきました。私はYくんを二度も見殺しにしたのです。

東京に帰り、あてもなく街を歩いているとゲームセンターがありました。通りながら中を見ると、入り口近くのゲーム機に目が止まり、見た瞬間「あー」と体中に衝撃が走りました。その電光掲示に「享年32歳」とあったのです。「余命検索サービスXIDAY」というゲームでした。質問に答えていくと死亡する年齢が表示されるのです。「32歳はYくんか」。私は心の中で叫び、その場に崩れるように座り込んでしまいました。「なんて罪深い自分なんだ」。後悔と申し訳なさで押しつぶされそうになっていました。

ゲームセンターから、ふらつと外へ出ると曇天でした。粉雪がチラついていました。鈍色の空を見上げながら、気がつくとも涙が流れていました。自己保身という消えようのない深い罪を、彼の32年の人生から、私は知らされたのです。



西田 国幹

1957年、埼玉県草加市生まれ。中央大学文学部卒業。小説家、脚本家、映画監督、演出家として活躍。代表作『11月22日の命』、『11月22日の命』、『11月22日の命』。

刊 2020/1月号から連載